Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-27

アダム・スミスの哲學思想

福田, 敬太郎

(Citation)
經濟學商業學國民經濟雜誌,34(6):875-901

(Issue Date)
1923-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053559

アダム・スミスの哲學思想

福田敬太郎

一、スミスの思想體系に於て殘されたる問題
二、機械論的自然觀
三、理神論的信仰
四、功利主義との關係

一

「國富論」の著者が同時に「道德感情論」の著者でもあることは既に周く人の知るところである。經濟學者としてのアダム・スミスは又倫理學者としても有名である。けれども同じ著者が「哲學的諸論考」(註一)の著者でもあることは餘り注意せられず彼が哲學者として紹介せられることは殆ど無いと言つてよい。固より、アダム・スミスの歷史的價値は彼が經濟學の鼻祖であることに存し、若し彼から「國富論」を取り除くならば彼の存在の意義は大いに減ずるであらうと云ふことは認められる。從つて「道德感情論」は「國富論」に比して其の受くる尊重の程度が低いことは寧ろ當

然である。況してスミスを哲學者として見ることは全然彼の歷史的意義を沒却することに似てゐる。斯く考へるときには「哲學的諸論考」の如きは棄てゝ顧ずとも可なりと言へるかも知れない。然し乍ら此處にバジェオットの言葉がある。曰く、「アダム・スミスの經濟學に就ては殆ど何事も語られて居らない。然るに彼は人間の中最も珍稀なる者の一人であるばかりでなく、彼の著書は彼が如何なる樣子の人であつたかに就て或る觀念を有することなくしては殆ど理解することが出來ないものである。」（註二）と。此の評論家の言葉を聽くまでもなく經濟學者としてのスミスを理解するに當つて人間としての彼を忘れることを得ないことは明かである。卽ち「國富論」を讀むに當つて先づ彼の傳記を窺ひ其の環境を知り如何にして此の名著が世に出たかを辨へて置く必要がある。此處に於て人々は「國富論」と「道德感情論」との思想的關係を問題とするやうに成る。學者の研究は既に屢々此の點に觸れて居る（註三）。同樣の志を以て進むときに前に見遁すも可なりと見えたところの「哲學的諸論考」も亦問題に成らざるを得ない。哲學者としてのスミスを觀察することは人間としてのスミスを研究することの一部である。其れは倫理學者としての

スミスを觀察することと等しく經濟學者としてのスミスを理解する爲めに必要なる仕事である。

勿論スミスの哲學思想を考察する爲には單に「哲學的諸論考」だけではなく其れに收められて居らぬ論文(註四)及び講義(註五)並に既に名ざしたところの二大名著をも紙背に徹する眼光を以て讀まねばならぬ。同時に彼の時代の哲學思潮一般をも顧る必要があることは言ふまでもない。私は此等の材料に就て直接にスミスの哲學思想に觸れて見やうと思ふ。而して此れが彼の誕生二百年を記念する私の小さき仕事である。

思ふにスミスは決して最初から經濟學の專門學者と成るつもりではなかつた。又何人も彼を經濟學者に育て上げやうとも思はなかつた。グラスゴー大學に於ける數學自然科學古典及び倫理學の研究、殊に當時其の大學の道德哲學講座に在つたハチソンの感化、又はオックスフォードに於ける自由なる勉學など一として特に經濟學の爲に行はれたものはない。青年スミスは唯々夢の如き理想を心に宿して眞理をのみ求めてゐた。彼がヒュームの「人性論」を讀んで咎められたことは有名なる事實であるが確かに當時の彼の性格と態度との一班を示してゐる。

彼の頭には常に人間と其の進歩と云ふことが問題の中心として横はつてゐた。人類の歴史卽ち文化發展の性質の其の原因を探求することが若き彼の目的であつた。彼が天文學・物理學・形而上學・論理學・修辭學等諸々の學問に興味を有ち得たのは其の爲である。諸國民の間に富が如何に生產せられ又如何に流通せられるかと云ふ問題も同じ目的の爲に研究せられたのであつて、其處に何らの特殊利益をも目標として居らない。極言するならば「國富論」に於ては人類の幸福と云ふことすら目標ではない。唯々人類歴史の眞相を見、文化發展の第一原因を知ることが目標である。オックスフォード六年の生活の間にスミスは一度も故國に歸らずまたロンドンへすら出なかつたと云ふことは、將來彼の衷に育ち彼に於て伸ぶべきものが充分に準備せられる爲めに缺くことの出來ないことであつたが、此の間に彼の頭の中に一つの體系が一つの基礎の上に組織せられつゝあつた。親しくスミスの講義を聽いた一人の紳士の告げるところに依れば（註六）、スミスのグラスゴー大學に於ける道德哲學の講義は四つの部分から成り立つてゐた。第一は自然神學であつて神の存在と其の屬性の論證を行ひ、宗敎が構成せられる人性の原理を考察した。第二は嚴格なる意味に於ける倫理學であつて主として後に「道德

感情論」で發表したところの學說を講述した　第三は特に正義(Justice)に關する事柄を詳細に取扱つた。スミスは此の部分をも公刊するつもりで「道德感情論」の結語に其の意思を明言してゐるが不幸にして實現することなく逝つたのである(註七)。第四は便宜(expediency)の原理に基き國家の富・力・繁榮を增進する爲に樹てられたる政治的規律を攻究した。此れが卽ち「國富論」の骨子を成すものである。此れに依つて觀るにスミスの「道德感情論」なり「國富論」なりは彼の偉大なる體系に結んだ二個の果實である。人々は常に果實の貴さを讃へることを忘れない。故に私は此處で言はゞ其の果實を結ばせた樹幹に就て考察を運したいのである。言ひ換へればスミスの神觀・世界觀乃至人生觀を研究して見たいのである。

二

スミスの思想體系に於て最も根本的なるものは確かに其の機械的自然觀である。固より此れは後に述べるところの理神論的信仰と密接なる關係を有することと明かであるが、彼の自然觀は彼の全思想の出發點を形造つてゐるものであるから此處に特に考へて見たい。蓋し彼が單に哲學と云ふときには自然哲學を意味

し、其の自然哲學は機械論的自然哲學である。彼思へらく、世界の現象は雜多である。個々の事件は互に如何なる關係を持つてゐるか容易に判斷することが出來ない。然し乍ら其の複雜極まる個々の現象間に見えざる一の連鎖があることを豫想することが出來る。加之其の連鎖を考へることは人間に與へられた理性の要求である。而して斯くの如き見えざる連鎖を見出すことが哲學者の任務である。經驗に入り來らざるものを想像し二個の現象間の外觀上の裂隙を塡めることに依つて全體は統一完足する。故に「哲學は自然の連絡原理に關する科學である。自然は、普通の觀察が獲得し得るところの多くの經驗の結果に依れば、其の以前に現はれたる總ての事件と孤立し連絡なきが如く見え、從つて想像が圓滑に展開して行くことを妨げ、其の觀念を互に秩序なく結合せしめ、斯くして混雜と錯綜とを生じ易い數多くの事件に滿ちてゐる。哲學は總て此等の散亂せる客觀を連絡するところの見えざる鎖を示すことに依つて此の不調和なる外觀を有する混沌體に秩序を與へ、想像の動搖を鎭め、而して想像が宇宙の大運動を探索する場合には、想像の要求する最も完全なる調和に歸することを努力する」（註八）。其れ故に哲學者は此の見えざる鎖を發見する特殊の才能を有つて居らねばならぬ。普通

人が論理の精密を厭ふ場合に彼は其の峻嚴を喜ばねばならぬ。「恰も大抵の人々には完全に調和し速度の整へるやうに聞ゆる音の中にも音樂家の微妙なる耳が尙ほ小なる缺點を發見するやうに、其の生涯を自然の連結原理の研究に費すところの哲學者のより熟練せる思索は、屢々彼よりも不注意なる觀察者に取つては全く密接に連絡してゐるやうに見えるところの二つの客體の間隙を感知するであらう。常に彼の觀察に現はれ來るところの總ての連鎖に久しく注意することに依つて、又彼等を互に比較することに依つて、哲學者は音樂家のやうに言はばより微妙なる耳と此の自然の事物に關してより微妙なる感情とを持つやうになつた。而して恰も音樂家に取つて最も完全なる調和を缺いてゐる音樂は悉く不調和であるやうに、哲學者に取つては最も嚴密なる且つ最も完全なる連鎖を缺いてゐるところの事件は全く分離散亂してゐるやうに見える」(註九)。然し乍ら本來個々の現象間には「何等の破裂・停止・間隙・離隔が無い」。若し哲學者の眼に破裂ありと見えたときは、彼は其れが完全に充足せられるまで見えざる鎖を追ひ求める。此處に哲學者の活動がある(註一〇)。

哲學の意義と哲學者の任務とを斯く觀じたところにスミスの機械的自然觀が

現はれてゐる。たとひ自然が神の創造に依つて存在するものとしても、既に出來上つたところの自然は其れ自ら一の完足體であり、其の中に生ずる個々の現象は一定の法則に支配せられ、外觀上の雜多は哲學者の思索に依つて單純に統一せられ得るものであると考へる。此處に神の意思の代りに人間の理性が優越し來る。此れは第十八世紀に其の成熟期に達した英國啓蒙思潮の典型である。スミスに取つて哲學することは畢竟理性の力で全體の調和若くは統一を求めることである。彼に隨へば古き時代に於ては斯くの如き調和を求める思想は起らず、自然を以て一個の機械的完足體なりとは考へなかつた。從つて自然の亂雜を結合する見えざる鎖を探索する試みは生じない。そこで人類の初期に於ては一神教の代りに多神教が生ずる。粗野なる迷信に於ては個々の事件は別々の神々・惡魔・仙女などの喜憂と關係があるとする。斯かる場合に人々の注意を惹くのは唯々異常の現象のみであつて、普通の事件は人々の驚異の對象と成らず從つて問題を提供しない。「火は燃え、水は流れる。其れは其れ自身の必然性に依る。其等の事柄にジュピターの見えざる手が加はつてゐるとは考へられない。然し乍ら雷鳴と電光、暴風と日光、此等は不規則なる現象であつてジュピターの機嫌如何に關係する

と思はれる。斯くの如く世界の最初の時代に於ては最も程度の低い又最も臆病なる迷信が哲學の代りをしてゐた。然るに律法が秩序と保安とを樹立し生活が確立すると人類の好奇心は增加し反對に恐怖心は減少する。彼等が享受する閑暇は彼等をして自然の有樣に注意せしめ、從來に優つて自然の最小の不規則性をも觀察せしめ、且つ其等總てを結合する鎖の何なるかを知ることを冀はしめる。斯かる鎖が外觀上離散せる如く見ゆる總ての自然現象を通じて存在せることを必然的に考へるやうに成る」(註二一)。

調和と統一とを喜ぶスミスの心は機械的自然觀の必然的結果である。「優秀なる器樂合奏は、其の樂器の數と種類とに依り、其等に依つて奏でらるる音部の變化に依り、總て此等の異れる音部の完全なる調和に依り、同時に聞ゆる總ての異れる音色の正確なる諧協に依り、又時を異にして聞ゆる異れる音色の接續を規律するところの節度の愉快なる變化に依り、極めて快適なる、極めて偉大なる極めて變化に富む又極めて興味深きものにして、模倣其他の方法を以て他の何ものをも提示することなく唯々其れのみで人心の全力を完全に占有し、例へば容器に物の充滿せる如く、他の何事をも考ふる餘力無からしめるものである。諧協に於ても接續

に於ても斯くも完全整頓せる體系に配列處分せられたる愉快にして調子よき音色の無限を熟考するときに、人心は實に極めて大なる感覺的快樂を享樂するばかりでなく、他の學問の偉大なる體系を熟考することから受けると異らざる極めて高き理知的快樂をも享樂する」（註一二）と。　スミスが音樂の美を讃ふる其の辭は直ちに移して天に於ける日月星辰の規則正しき運行の妙と地に於ける山水花鳥の秩序正しき調和の妙とを讃ふる心を表はしてゐる。彼は全く同樣の心を以て社會に於ける一切の交通も亦統一せらるべきであると考へ、其處に存する調和の美を心から喜んで待ち受けた。斯くの如く機械論的自然觀の根本思想から社會的調和の思想が生じたことは、たとひ自然現象と文化現象とを單純に類推することに對する非難があるとするも、スミスに於ては特に注目すべきことである。蓋し此れは經濟的自由主義の自然哲學的根據とも言ふべきものであつて、後にフランスに於てバスチャの如きが時代錯誤的にではあるが死物狂ひに成つて賞讃したところである。

三

スミスの思想體系に於て機械論的自然觀は一の基礎を形造つてゐるのであるが、其れが何故に然うなつたかと云ふことを次に考へて見たい。此れを廣く啓蒙思潮の特徴として概言することは不充分である。そこで私はスミスの個人的信仰に立ち入つて彼が自然乃至世界を斯く觀せざるを得なかつた根本的理由を明かにする。

スミスが樂觀論的理神論の完全なる代表者であると云ふことは(註一三)稍々過言であらうけれども、彼の神觀が理神論的であることは認めねばならぬ。成熟期に達せる理神論的思想が漲つてゐる時に故國のカルヴィニズムに冷淡であつたスミスは宗教的情熱に依る代りに理性に依る世界觀を冀つたことは寧ろ當然であらう。「原始時代に於ては自然の外觀上の不一致は人々を困惑せしめ自然の作用の中に或る規則的體系を發見することを斷念せしめた。彼等の無知と思想の混亂は必然的に臆病なる迷信を生んだ。其の迷信は殆ど總ての不意の事件を或る計畫的なる然し見えざる存在者の特殊の目的の爲にする劃策的意思に歸した。原始に全體を創造し普遍的法則に依つて全體を支配し何等の私的個別的の利益からではなく全體の維持と繁榮とに導くところの總てのものの神・普遍心の思想

は彼等に全く知られざる觀念であつた。彼等の神々は、たとひ或る特別の場合に干渉すると考へられるけれども世界の創造者と見られることなく、寧ろ神々の起源は世界の創造以後のことであるやうに考へられてゐた。心、理解、從つて神性は最も完全なるものなるが故に必然的に、彼等に從へば（初期のピタゴリアンを指す）自然の所產である。宇宙が完全なる機械として普遍的法則に依つて支配せられ普遍的目的卽ち其の完成と繁榮と其れに存する總ての種族の完成と繁榮との爲に導かれるところの統一體として觀られるや否や、宇宙が人工に依つて造られたる機械と似てゐることは必然的に識者に、世界の原始的創造に當つて人工に似たる然し乍ら世界は人工の機械よりも勝れる故人工よりも遙かに優れたる一の技術が用ひられたに違ひない、と云ふ信仰を與へた。此の古き哲學に從へば最も完全なる組織の統一は其の技術に依つて組織が造られたる其の原理の統一と云ふ觀念を提示する。斯くて無智が迷信を產んだ如く、科學は神の啓示に照らされなかつた國民の間に起つたところの最初の有神論を生んだ」（註一四）とスミスが古代形而上學の歷史を物語る中に自ら彼自身の神觀を現はしてゐる。進んで彼がプラトーを說きアリストテレースを語つて彼等の神觀を紹介する間にも同樣であ

る。曰く「世界を創造したところの智者は、世界に生命と悟性との原理を與へ、其れは其の中心から最も隔れたる周邊に及び、其の總ての變化を知り、其の創造の大目的に其の總ての運動を支配嚮導して行く。此の世界の精神は其れ自體一の神であり、總てのものを從ふる最大のものである」(註一五)。此處に現はれてゐるところの汎神論的色彩並に第一原因說は取りも直さずスミス自身のものである。

神を「宇宙の最初にして最高の動力」(the first and supreme mover of the Universe)なりとする窮極原因說がスミスの思想體系に於て重要なる地位を占めてゐることは彼がハチソンに隨ひヒュームに及ばぬ點である。「道德感情論」の讀者はスミスが絕えず人間を以て神意を遂行する爲に工夫せられた精巧なる有機體なりと觀ずることを發見する。固より彼は合理的說明を與へる爲に其の構造を簡單にしたから彼以前の直覺主義者に見るやうな原始的本能の複雜性は消滅し、神の代表者として人間の胸裡に宿つてゐる美的なる又自律的なる本能は同情と云ふ單純なる要素に歸一せしめられた。然し乍ら所謂「胸中の人」(the man within the breast)と云ふ觀念は道德的存在者としての人間を最初に設計した者の型を示してゐるものである。同樣の窮極原因の觀念は「國富論」の讀者も亦之を印象づけられる。世

界經濟の機構が一定の秩序を保つて運行するものであり、從つて個人の自由なる判斷に委せて置けば「見えざる手」(the invisible hand) の指導に依つて圓滿なる發達が行はれ、社會的福利も亦增進すると考へた思想の中に我々は一の直覺的要素を發見する。

此の窮極原因說は當然「存在するものは總て正し」(Whatever is, is right.) と云ふ存在無謬說を派生する。何となれば窮極原因としての神は、一般に理神論者の說く如くスミスに從つても亦「偉大にして慈愛なる而して總てを知り給ふ者」(a great, benevolent, and all-wise Being) であつて彼自身の完全性の爲に宇宙に常に「幸福の最大可能量」(the greatest possible quantity of happiness) を維持する者である(註一六)。此の神は宇宙を創造したる後は存在を超越して常に唯々自然法を通してのみ其れを支配する。此の場合造られたるもの一として良からざるはなしであつて、凡そ存在するものは合理的であり、合理的なるものは存在することに成る。存在と理法、Bios とLogos とが斯くまで完全に一致することは他の神觀に於て見ることが出來ない。此處に徹底的樂觀論が產れる譯である。「行くに委せよ。通るに委せよ。地球は自ら運行する」。此處に於て汎神論に墮することはなくとも、自然法と神法とは全

く同一視せられるやうに成る。

宇宙に存する神秘的なる調和又は秩序の觀念はシャフッベリー以後の道德哲學者の繼承的遺產である。シャフッベリーにあつては其れは理性に依るよりも感情に依つて美的に受け入れられたが、後繼者にあつては段々と形式的に成つて來て、調和の意味が窮極原因の論理的展開と云ふやうなものに成つたのである。スミスの樂觀論は此處に根ざしてゐる。彼に取つては神は宇宙を通して顯現し人間の精神に依つて認知せられ維持せられるところの精靈である。斯くて宇宙は神の力の外的表現であるから其れを認知するところの人間の精神をも含めて一切萬有が自然的に善であらねばならぬ。利己心も亦永遠の目的に合致するところのものである。此れはスミスの神觀から生ずる當然の結論であるが、斯くの如き樂觀的信仰を維持する爲には我々は眼を世界の暗黑面から背け、惡しき情慾と望なき苦痛とを無視する必要がある。誠に第十九世紀の前半、產業革命の後に於て社會的害惡が我々の眼を逸するには餘りに熟し過ぎた際に於て、功利主義的立場に旗を擧げた人達から此の樂觀論の上に立つてゐたスミス主義の亞流たるマンチェスター・スクールが手酷く攻擊せられたのも無理でない。尙ほ此のこと

は功利主義との關係を考察するに當つて考へ直すこととして、次にスミスが理神論を如何にして獲得し又如何なる程度まで捕捉したかを考へて見る。

抑々スミスに思想上の出發點を與へた者は其の師ハチソンである。「束の間も忘れ難きハチソン！」(The never-to-be-forgotten Hutchson!) 此れはスミスが思出多き母黌に選まれて總長と成つたときに言つた言葉である。誠にハチソンを措いて何人が斯くもスミスを醒めしめ得たであらうか。スミスは屢々ヒュームの弟子であると云はれ、又ケネーの門家であると考へられる。然し乍ら若しもスミスが何人かの門弟であると云ひ得るならば彼は實にハチソンの門弟であつた(註一七)。故にスミスの神學思想の芽生えも彼と其の恩師との關係に於て見出すべきであらう。

第十八世紀前半のスコットランドは古き清教主義と新しき理神論との戰場であつた。其の激しき鬪ひは大學の構内に於ても行はれた。當時ハチソンは新進の思想を以て立ち大學の壁内にある若き人々に一の new light として崇められてゐた。其れだけ又彼は壁外の古き人々には嫌はれ、あらゆる傳統的信條の破壞者であると鋭き攻擊を受けた。ハチソンの先に道德哲學を講じた者は Gershom Car-

michael と云ふ清教徒中の清教徒と稱へられた哲學者であつた。ハチソンは實に此の人の後を承けて、蔭暗きカルヴィニズムの覆ひを破り將に展開せんとする新時代を翹望して立つたのである。今や恰も「自然」の光が輝き第十八世紀の「神」(Deity)が顯はれやうとしてゐる。此の慈み深き神は人類の幸福の爲にのみ存在する。彼の意思は神秘なる徵兆と攝理とに依つて知ることは出來ないが、廣く人類の最大幸福を考へることに依つて知ることが出來る。「最大多數の最大幸福」(The greatest happiness of the greatest number.)。ハチソンは實に此の有名なる文句の最初の發言者であつた。然し此れは憐れにも崩れかかつてゐた從來の神學の擁護者に取つては呪詛の聲であつた。實に此の危機に於てグラスゴー大學に一大事件が起つたのである。卽ち中會(Presbytery)はハチソンをウェストミンスター信仰告白に逆き學生に誤れる危險思想を說く者として起訴した。危險思想と云ふのは第一に道德的善の目的は他人の幸福の增進であるとなすことで第二に我々は神を知らずして善惡の知識を持ち得るとなすことであつた。此の事件は云ふまでもなく學生間に深甚なる動搖を與へた。而して彼等は中會に正式に代表者を送つて彼等の new light を或ひは口舌に依り或ひは文書に依つて熱心に擁護した。此れは

丁度スミスがグラスゴーに來た最初の年のことである。從つて彼はまだ初年生に過ぎなかつたから此の戰鬪に於て第一線に立つて働くことは出來なかつたであらうが、決して心動かずに過ぎ得なかつた。卽ち其の頃又は其の後彼はハチソンの敎室に入り其の自然神學の講義に耳を傾け、又恐らくは每日曜日に聞かれた神學特別研究の私講に參聽して、ハチソンの宗敎的樂觀論を自分の信條として受け入れ死に至るまで其の影響の下に在つた(註一八)。

スミスは彼の祖國の民衆の間に勢力あるカルヴィニズムに反抗しないまでも冷淡であつた。彼は此の點に於て蘇國人と云ふよりも近代的の意味に於て英國人である。そこで彼は決して進んで宗敎的問題に就て書くことをせず又好んで其れを話すことすらなかつた。故に彼の理神論的信仰が如何ほどの深みを持つてゐるかを積極的に證明する完全なる材料は無いと言つてよい。スミスが神學的議論に近いものを試みたと見られる唯一の場合はヒュームの死んだ時にStrahanに宛てて書いた手紙に現はれてゐると考へられてゐるが、此れも實は唯々彼がヒュームの性格の中に見出した美點を想ひ起して適當なる讃美を捧げたに過ぎないものである。快活堅實、偉大、慈愛、寬仁、無邪氣、勉勵、總て此等の德性が見出される

と記述した。其結語に、「要するに私は常に彼を彼の生前に於ても又死後に於ても恐らくは人間の弱き性質が許す限り全く賢明にして有德なる人の理想に近づきつつあつたものと考へます」、と言つた。此の手紙に於てスミスは彼の敬愛してゐた友の信仰を云々するつもりでは無かつたであらう。然し乍ら當時の人々の耳には此の簡單なる發言すらも宗教そのものに對する攻擊の如く響いたのである。人々は常日頃宗教なくしては有德なる生活を送り得ず又平和なる死をも遂げ得ずと聽いてゐた。然るに今此處に彼等が基督教の最大の敵であると思つてゐたヒュームに對してスミスが言葉を極めて褒めたので彼等はスミスをも無宗教者又は懷疑論者であると定めて了つたのである。固よりスミスのヒューム評に就て贊成者もあつたけれども一般には聽き容れられなかつた。却つて其れは宗教の眞理を破壞する惡しき企圖である、daring effrontery の一片であると云はれた。此處にスミスに對して眞正面から競爭しかかつた監督ヂョーヂ・ホーンと云ふ人が居る。匿名の小冊子「ディヴィッド・ヒューム氏の生死及び哲學に就て基督者と呼ばるる民衆の一人よりアダム・スミス博士に呈する一書」(註一九)に於てホーンは、ヒュームはスミスが云ふやうに善人でも有德者でもあり得ない、若しヒュームが眞

に溫良であつたならば彼は人の心から神の知識と美はしき信仰とを拭ひ去り國中に無神論を播き廻るやうなことはなかつたであらう云々、と反駁したのであるが、スミスは之に對して何らの答辯をも與へなかつた。然し乍ら此のことを以てスミスがヒュームを以て無神論者であると考へてゐたと解してはならぬ。況してスミス自身が無神論者であり又無神論の弘通を願つてゐた者であると考へることは不當である。反對にスミスの諸著書に現はれたところから間接に斷言し得ることは、彼自身は確かに有神論者であり、加之ヒュームの自然主義的傾向とスミスの直覺主義的傾向とは原理的に相容れないに拘らずヒュームをも自分と同樣に有神論者であると考へてゐたと云ふことである（註二〇）。此のことは別にスミスの理神論的信仰を積極的に論證することに成らない。即ちヒュームは哲學的に理神論に最後の打擊を與へた人であるから彼との關係に於ては却つてスミスの理神論的信仰を否定することに成るやうである。然し乍ら明かにスミスの哲學的立場は寧ろヒューム前期のものであり、更にヒュームに於ても實際的方面の論述に於ては尙ほ豐かに理神論的傾向が現はれて居ることを思へば、スミスは正に爛熟せる理神論的信仰の抱懷者であると斷言することが出來る。

四

スミスの神觀の中に功利主義的色彩があると云ふことは全く根據のない考察ではない。神は人類の幸福の爲にのみ働き、個人の自由なる活動は自ら社會的福利を增進すると云ふ思想が、道德的行爲の標準を幸福に求める主義と一致するは當然であるやうに見える。然し乍ら私の觀るところではスミスは本來の意味に於ける功利主義者ではない。此處に所謂功利主義は第十八世紀の後半から第十九世紀の中葉にかけて流れた英國思想界の主潮である。詳言すれば理神論の爛熟の結果其の超樂觀論的人生觀が當時徐々に擡頭し初めた諸種の社會問題、殊に產業革命が產み出した新しき勞働問題を解決する力を缺くに至り、而かも未だ獨逸理想主義の影響を受けることなき時代に於て英吉利の心ある者を動かした思想であつて、ベンタムを其の代表者とするものである。其處には快苦を數量的に計ることを試みるほど合理主義的傾向が强く現はれてゐる。最大多數の最大幸福と云ふ功利主義者の標語は、たとひ其の言葉がハチソンに依つて初めて用ひられたとしても彼に於ては未だ數量的意義を以つて用ひられたのではなく、ベンタ

ム以下に於て正しく數量的客觀性を與へられた。功利主義が具體的に社會的幸福を目標とすることが出來る譯は全體の一部分の完全を以つて滿足するからであつて、若し理神論の如く全體の完全を要求する場合には其れは出來ないことに成る。此處に於て理神論と功利主義とは原理上相容れないものを持つて居り、從つてスミスを何らかの點に於て功利主義者なりと云ふことは寧ろ誤りに導くところの立言である。スミスは少くとも學問の非功利性を主張して居る。彼は學問の進歩は利益を目的とすることからではなく唯々人心に存する驚異の念からであると云ふ。曰く、「安んじ喜んで自然の規則的進行に伴ふところの人々の想像の歩みは外觀上の不調和に依つて阻止せられる。彼等は驚異を感じ、其れに先んずるところのものと結合することに依つて宇宙の行程を調和統一せしめるところの或る中間的事件の鎖を要求する。其れ故に驚異が、而して其の發見から生ずる利益の期待の如きものではなく、自然の多樣なる外觀を統一する隱れたる結合を明かにせんとする學問たる哲學の研究に人々を趨かしめるところの第一原理である。而して此の研究を其れが多くの他の快樂の手段を彼等に與へる傾向を顧ることなく其れ自體に於ける本源的快樂又は善として其れ自身の爲に研究す

る、」(註二一)と。

然らばスミス更に遡つてはハチソンが功利主義的色彩を帶びてゐるやうに見えるのは何故であらうか。此處に我は宗教的情熱から哲學的滿足を通つて政治的活動へ移つて行つた一つの歷史的典型を顧みなければならぬ。換言すれば博愛思想の合理化的傾向と其の實際主義的要求への發展とを認めねばならぬ。「爾曹互に相愛すべし」との基督教的愛の倫理から初代に於ける愛の共產主義が實行せられ、「己の如く爾の隣を愛すべし」との博愛の原理から中世を通じて諸々の社會的施設が發達して來たが、其處に生じた各種の實際的效果に拘らず其の動機は常に宗教的非合理性の要素を豐かに含んでゐる。第十七世紀に於ける淸教倫理に就て見ても其のことは明かである(註二二)。博愛の實行は社會的完成の爲ではなく神の榮光の顯現の爲であり又個人の德の完成の爲である。其の目的は客觀的に存在してゐると云ふよりは寧ろ主觀的に存在してゐた。此れは宗教的博愛思想の特徵である。然し乍ら現實惡が罪の問題を離れて人々の注意を惹くやうになると同時に博愛思想が一層實際主義化する。人類の墮落と云ふ代りに社會的缺陷と云ふ言葉に依つて現實惡を示し、博愛の實行を求める代りに合理的政策に依

る社會的改善が行はれるやうに成つた。近代の社會問題に就て慈善を輕視し溫情主義を排斥する理由は他にも存在するのであるが、其の最も根本的なるものは現實惡を合理的に取扱はんとする心である。博愛の實行は其の宗教的非合理性を棄てて實際主義的合理性を保たねばならぬことになつた。英國道德哲學の發展の中に最も著しいことは宗教と倫理との絕緣であるが、ハチソンに就ても見た如く德の標準は神の啓示に依ることなく人類の幸福の尺度に依つて測るべきものとなつた。神の榮光よりも人類の幸福と云ふことが問題の中心と成るときは宗教的情熱が衰へて哲學的滿足に移つたときである。ロック以後第十八世紀の英國思想家達は大體に於て此の態度に止まつてゐる。然し乍ら此のことを以つて直ちに彼等を功利主義者なりと考へてはならぬ。功利主義は斯くの如き人類の幸福を目的とする哲學的滿足を押し進めて實際的效果を產み出さんとする具體的努力が伴ふものである。功利主義者は單純なる享樂主義的哲學者ではなく社會的最大幸福を追求する政策家である。斯く觀ずるときにスミスが功利主義に對して如何なる關係に立つてゐるかを定めることが出來るであらう。彼は實際的功利主義者ではなく單に廣き意味に於ける幸福主義者に過ぎなかつた。

此れは彼の理神論的人生觀から生ずる當然の結果である。

—神戸・一九二三・四・二〇—

（註1）Essays on Philosophical Subjects, (Quarto, pp. I—XCV. 1—244.) 此の書は一七九五年に出版せられ、序に代へてスチュアートの簡潔で而かも正確なるスミスの傳記 (Dugald Stewart, The Account of the Life and Writings of Adam Smith. スチュアートが一七九三年一月二十一日及び三月十八日の二回に亘つて Royal Society of Edingburgh で講述したもの）が載つてゐる。編纂者はスミスの遺言執行人 Joseph Black 及び James Hutton である。内容は次の如し。

I. The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries; illustrated by the History of Astronomy. (pp. 1—93)

II. The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries; illutrated by the Ancient Physics.(pp. 96—111)

III The Principles which lead and direct Philosohical Enquiries; illustrated by the Ancient Logies and Metaphysics. (pp. 113—129)

IV. Of the Nature of the Imitation which take place in what are called the Imitative Arts. (pp. 131—184)

V. Of the Affinity between English and Italian Verses. (pp. 185—194)

VI. Of the External Senses. (195—244)

右の内第一から第三までは論題にも示されてゐる如く内容に於て連續してゐる。此等はスミスがオックスフォード六年の生活を終り、一七四六年八月カーコーディに在す懷しき母の膝下に歸つてから、一七四八年の冬エディンバラに出るまで靜かなる二年間の製作であり、第四は恐らくはエディンバラに於ける講義であつたらうと考へられてゐる。

(註二) Walter Bagheot, Adam Smith as a person. (The Works and Life of W. B. VII. p. 1.)

(註三) 我國に於ても藤井健次郎博士あり(哲學雜誌第三十三卷第三百七十七號)。

(註四) Consideration concerning the First Formation of Langnages, and the Different Genius of Original and Compounded Languages. 普通「道德感情論」の附錄と成つてゐる。

(註五) Edwin Cannan, Lectures on Justice, Police, Revenul and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith. Oxford 1896.

(註六) グラスゴー大學法律學教授ミラー氏(スチュアートのスミス傳參照)。

(註七) Moral Sentiments. p. 503 (Bohn's Libraries).

(註八) Philosophical Subjects. p. 20.

(註九) P. S. pp. 19—20.

(註一〇) P. S. pp, 14—15.

(註一一) P. S. pp. 25.

(註一二) P. S. p. 172.

(註一三) Leslie Stephen, History of English Thought in the 18th Century. Vol. II. p. 71.

(註一四) P. S. p. 107.

(註一五) P. S. p. 107.

(註一六) M. S. p. 345.

(註一七) John Rae, Life of Adam Smith. p. 11.

(註一八) Rae, Life of A. S. pp. 12—13.

(註一九) George Horne, A Letter to Adam Smith, LL.D. on the Life, Death, and Philosophy of David Hume, Esq., by one of the People called Christians.

(註二〇) Rae, Life of A. S. pp. 311—314.

(註二一) P.S. p2g.

(註二二) 拙稿・清教倫理的經濟思想(本誌第三十二卷第三號及第四號)。